

成田安輝西藏探検行経緯（中）

—— 外交資料に見る東チベット經由入藏挫折記 ——

木 村 肥 佐 生

一、義和団事変と成田に対する帰国命令

この当時（明治三十三年）、「扶清滅洋」を叫ぶ義和拳教の信者集団（その教義は、孫悟空、猪八戒らを神と祭り、拳法、棒を練習する事により、刀槍、銃砲にも傷つけない神力を得る事が出来るとする宗教的秘密結社）が山東から直隸に入って天津、北京へと進み、鉄道、電線を破壊し、教会、病院、宣教師、キリスト教信者、一般外国人を襲撃し、又、外国商品を焼き、盲目的に中国から外国人と外国文化を一掃しようとした。清朝政権を掌握していた西太后一派は、この排外運動を助け、その結果、北京に籠城した諸国外交団、居留民を救出しようとする日、英、米、仏、露、独、奥、伊の八ヶ国連合軍と開戦するに至った。そして戦いは清国の一方的敗北に終った。これが義和団事変又は、北清事変と呼ばれる戦いである。重慶に在った日本領事館もこの盲信的排外運動の普及を警戒して杭州へ引き揚げていた。明治三十三年十月一日附、在杭州元重慶領事館事務代理 山崎桂より外務省總務局会計課長

三橋信方宛ての書信は成田の消息を次の様に伝えている。

「成田安輝本年十月より十二月迄三ヶ月分手当金百八拾円此洋銀百六拾九弗八拾壹仙に對する爲替券壹葉客月廿七日付機密送第五号を以て御送付相成致領収候 然るに同人現住地不明の爲め今日迄其儘小官に於て保管致居候處客月六日重慶発同人の書信着し不遠当地へ罷越様申来候間該金額は当地に於て同人へ交付の事に相成可候 此段回答旁豫め得貴意候 敬具」

同年六月、一旦、西藏向け出發した成田が重慶經由杭州へ出て来ると言う知らせである。十月十五日附、在杭州、山崎発、東京、青木外務大臣宛て英文電報は

「成田 arrived, and desires to continue preparations for travelling westward, some arrangement having been made in 成都 already, could he not be allowed to stay in China. Instruct by telegraph.」

「成田到着、西方への旅行準備継続を希望、既に成都に於てある種の手配完了せる由 彼の中国滞在 許可相成る間敷きや 電文指示を待つ」

これに對し翌十月十六日附、青木外務大臣より在杭州、山崎宛て返電

「成田's application as stated in your telegraph of 十月十五日 is hereby granted」

「十月十五日付貴電による成田の申請を許可する」

斯くして成田に日本帰国を命じた外務大臣命令はいともあっさりと撤回されている。山崎 桂が成田の進退に關して外務大臣宛て電報を發した経緯について、山崎は次の様に説明している。

二、山崎領事書信 成田の進退伺を説明

明治三十三年十月二十二日 於杭州 山崎 桂

松村通商局長殿 内田政務局長殿

拜啓 益御清康奉拜頌候 擬成田安輝氏本月十四日成都より当地へ帰着し彼地に於て入藏の準備に取掛りたる模様を聞くに時節柄 駐藏大臣赴任の一行に混入する事は遂に目的を達する事能はさりしも他に支那人と同行するの計畫相立ち又駐藏大臣も四川を離れたる以上は自分等の入藏に付格別阻碍を企てざる□被見受候旁是非共当国に踏止まり素志相果し度旨申出豫て四川旅次に於て一身の進退に付在上海小田切領事經由青木大臣へ伺出たる節大臣より日本へ帰れとの電訓を接交したる事に談及し若し帰朝の上入藏の事成功無覚束との望を以て此儘中止せらるる様にては甚だ不本意の次第にて是迄の志望も水泡に帰すべきに付最初の計畫通り五年間は是非共之れに従事致度趣を以て頻りに帰朝後の進退を掛念するものの如く被見受小生に於ても同氏が切角是迄の経営を以て成都に於て已に入藏の準備を整ひたりと言ふ以上は此儘継続して其素志を実行せしめられ候方可然と相信候へ共帰朝を命せられたる身の此儘中途に淹留する事は不相叶儀に付過日電報を以て同氏の進退を伺出つる事と相成たる始末に御坐候 嗣て同氏の希望通り当国に留り入藏準備を継続するの許可を得候に付同氏は上海へ向け出発致候 成都に於ける準備の模様等に関しては同氏より追つて詳細申し出候様話し居候。

右の山崎書翰は、成田が赴任途中の駐藏大臣一行と同行する事に失敗したが、他の支那人と同行して入藏する計畫が出来た事、成田に対する帰国命令にもかかわらず、成田の入藏計画の継続を支持する所信を表明している。

尚、成田安輝自身も十月三十日附、加藤高明外務大臣宛て、西藏行継続を要請して次の様な長文の書信を送っている。

三、成田書信、外務大臣に進退伺の経緯説明

第参号 (明治卅三年十一月二十二日接受 機密受第三五七一号 總務長官内田康哉 主管政務局 石井印)
成田安輝支那在留可否電伺せし件

曩きに成都滞在中、日本に歸るへき電令ありしも在杭州山崎領事より成田は西藏行に就き幾多の準備を成就して歸着せり支那に在留するを得へきやと電伺せし理由を啓陳せんとす

滿州大官の傲然たると北京事件の酣なるに際しては駐藏大臣との面謁すら困難ならんと豫想せしに別紙慶大臣との交渉状況の通り業已に幾多の手續を行了せし以上は私に進入する一準備を此擾乱の時勢にも係はらず比格的好都合に終れりと言ふも可なり 加之久しく西藏に居留し一時歸省せし者前後二名を探り得て拉薩の状況を審にし先般既に報告せり 又成都に家族ある一商人にして嘗て慶大臣に従ひ西藏内に遊び支那文字は固より西藏語をも少しく解する者を尋ね得て案内者として同行の豫約も畧は成れり 成都に於て藏情を探る如此 好旅伴を得る如此きは至難に属すれとも今之を爲すを得しは幸福と言ふへし 藏情に通する者言ふ明末の乱に當り拉薩に居留せし支那人は殆んど悉皆藏人の爲に殺戮に遇へり藏人北變を知らは如何なる騷擾を惹起すや未だ知るへからず 暫く出發を猶豫し時局如何を見るに如かすと告ぐる者ありしも之に関せず前進の豫定なりしに八月四日に至り重慶山崎領事より急電あり曰く「英米已に去り我亦不日滬に向はん速に去就を決すへし」と越

えて同月七日に至り更に來電あり「我等明日下去す兄亦宜しく速に歸計をなすへし遅き事なかれ」然るに成都官城中に於ては電報通信を嚴秘し謠言頻りに起るも北方の情勢如何なるか將た長江沿岸の形勢逼迫せるか或は重慶一帶如何の事情を發生せしか何れも詳確なる消息を知り難く而して前記七日の電報接手せしときは山崎領事既に退去後なるへきを思い上海總領事に向ひ「當地無事北變若し直く濟む様なら打箭鏢に行きたし返事」と電問せしに唯「なかなか濟む様子見えぬ」と返電ありしのみにて委曲を知るに由なし又山崎領事より歸計を速迫せしは大臣へ経伺の結果なりし事郵便にて了知すれとも此際歸還するは頗る遺憾に堪へず猶ほ一應前進を請はんと欲し「當地無事 前進願ふ大臣の指令伺ひたし」と更に上海に電請せり 数日の後返電あり「外務大臣より日本に歸れとの電報あり小田切」前進許可せられず因て想ふ此事變を幸ひ或は歸京を命し藏行を廃止するならんか然らすんは一時上海辺に下る可なる筈ならん 更に又以爲らく北變急なり剪劣生か如きもの亦北方に用ひらるる所あらんとするか未だ遽に知るへからずと 於是急に歸還の準備を整へ總督奎俊翁始め官民諸友に辞行して歸途に就けり 滞在中密に總督に建言する處あり總督贈るに其寫眞一葉を以てせり是其嘉納の意を表示せるなり四川省は西藏に疆域を接し四川總督將軍往々藏事に関係あり故に其信用を得置くは他日の爲の必要なしとせず 故に此舉に出でしなり成都附近在留英米人は二十七、八日前既に悉く退去せり 前進せんと欲し逗留せし生今や最後の外國人（佛人を除き）として成都より退還する止を得ざるに至れり 重慶に着すれば英國領事既に再び歸還し聯合軍已に北京に入り大局の形勢慢乎として迫らす 却て返軍の説あるに至れり 降て上海及杭州に於て生か進退上日本に歸れとの命令ありたる御趣意の如何に付問ふ所ありしも固より其実情を知るに由なし蓋し從來調査せし東部西藏地の状況等復命の爲にもあらざるへし 顧るに前年來當路屢々更迭ありしを以

て或は最初事の成立を明にせられず又は深く其難易を察せられず單に速成の望なきを臆断せられ中道にして此企畫を廢絶せらるるの詮議に基きたるには非ざるかを疑ふに至れり 生素より妄進の易きを知る然れとも妄進は事を過る 曩きに某兩僧あり言語不充分事情不研究なるに拘はらず日本僧侶として進入するの可否をも探知せず來清の當年直ちに冒進して遂に中途拒絶の運命に遭遇せり 急げは事を誤る如此、豫め研究の結果は一度足を挙げれば成るを期し 豫め調査の結果は一度目を觸れば明なるを欲す 然れとも如此の地に入る或は萬一如何なる事あるや計り知るへからず是固より決する所若し之か爲め西藏開放を遂げ我と密接せしむるの好機を開けは一死基より甘するなり 然れとも徒らに過度の老婆心を以て此舉を廢止するか如きあらは生は固より之を辞す 一、二の我國人血を流さされは或は恐る西藏開放の必要知るものなきを 抑も當初此舉賛成せられしは小村現任露國公使か次官たりしときにして當時政府も其必要を感じ適當の人物搜索中なりしも大いに困難を感じせりと言えり 之に與りしは大隈 樺山 西の緒氏なり 大隈氏大臣たりしとき提議し 西氏に移りしときに決定せり 此事たる其目的を達するに於て事の容易ならざるを慮り五年間の継続事業なれば承諾すへし内閣の變動其他の事故の爲め容易に停止するが如き事あるときは如此遠僻不便進入し難きの鎖國に對し依託の責を尽す能はざるを以て當初より之を辞退せしに小村氏言ふ理素より然り故に半途にして棄てて顧みざるか如き不忍耐者は當省亦之に依託せずと 後數日面語の際五年間繼續の事記録すへき所に既に登記せり復顧慮するを止めよと 即ち之を承諾せり 而て当初より今日迄進入を得ざりし理由左の如し

初年(卅一年) 此一年間は最初より重慶語を研究し次年に至て四川人として進藏の豫定なりし

二年(卅二年) 此春打箭鏢に豫察に赴き歸重せし後西藏に齋らすへき本省よりの荷物交通運輸不便加ふるに大

水等の爲め延着せしを以て出發するを得ざりき

三年（卅三年）此春出發し途中成都に於て駐藏大臣と交渉中北變に遭遇し重慶なる我居留民皆引挙げ生も引攀へしとの電報達せしも前進せんと欲し電請せしに日本に歸れとの電命ありて許可なし

今や英、米、佛の傳教師等は既に西藏の四境を囲繞せり 露國官吏及軍隊は其西北に在りて各種の注意を怠らす附近の道路の如き昨年既に開鑿に従事せり 傳教師等は布教よりは寧ろ西藏及其言語を研窮しつつあり又藏境に臨むに先ち北京に於て藏語研窮中の一群あり 或は徐々に歩を内部に進め人烟稀少の地に既に不動産を所有するあり固より信者ありて然るにあらず皆異日の地盤を造らんか爲めのみ 聖書及簡易讀本の如きは既に西藏文に譯せられたるを目撃せり 西藏旅行者英人テーラ老嬢の如きは既に藏人を随へて英國に歸り再来して現に印藏境界亜東に根據を定めて布教順備の名の下に妻子を携へたる同志者凡二十名にて藏語研究 藏事查察等に従事す 婦人すら尚ほ如此 其他近年藏内探検旅行を企つるもの一、二を以て数ふへからすと虽とも英人サアページ・ランドルの如き其尤も著名なるものなり 宜哉 亜非利加に亜米利加に皆業已に其植民地と化し去りしや南洋諸島に至るまで亦皆如此 退縮主義 小島根性 近眼主義の舊疾を治し大に元氣を養成すへきの秋なり 責めては同洲 同教 同種の西藏迄は支那同様我國と關係を密接にせしめん事我國の得策なり我國人の爲すへき天職なる事を主張して憚らざるなり 夙に此確認あり然れとも維新前の高山彦九郎に同しく世其説に耳を傾け力を貸すものなく誰か此狂愚を扶翼せんと想ひしに流石外務の局に當たる本省は卓絶の識見を備へられしかは遂に賛助を得て運動する事となれり 名譽あれば國に歸し不名譽あれば己れに歸せんのみ 他國は西藏方面に向て財力を惜ます百万其國利を伸張せん事を務むるに當り萬一我國に於て西藏は迂遠顧るに足らずと

なし之れか探検に關する些額の費用を補出する事すら之を廢絶せんとする説を持するものあらんか生は竊に疑ふ是我國の勢力を擴張せんと欲するものにあらざるなきやを　北米合衆國ロッキー山高原上に在るモルモン宗植民地なるソルトレーキ市及産鑛最も豊富を以て著名なるモンタナ地方の繁盛今日の如くなるも現に四、五十年前以前は狐狸の巢穴印度人逍遙の荒野たるに過ぎきりしなり　換言せば亜米利加全土亦此地の集合なり當初無産の荒野も有識有力の優等人種の移住するに及て産出物を増加し土地亦聲價を生ず　絶東の東部西比利亞も寒涼不毛の地なり何ぞ派人經營を要せんとして顧みるなかりせば曷んそ今日の如き沃野都會を見んや　列強其國勢伸張を計り世界の各方面に向ひ膨張しつつある廿世期の今日に於ては　外交上外面のみ一時聲言するに　我れは小島閉居主義なり貳心なし疑ふ勿れと言ふの要あるもあらんなれとも　其内實に至ては上下共に益々大に進取敢爲の行爲を勵み平和と正當なる手段とを以て我商業區域と移民區域とを擴張し國勢伸張を籌策せざるへからず　之れか爲には巧妙なる外交を主腦とし劍を右にし財を左にし其發達を保護せざるへからず　東亜大陸の全體を通して廣く我國人來住し各種の業務を經營せん事を欲して止まず　惟ふに今の地球は一大棋盤の如し列國此上に囲棋の戲を演ず　西藏の空地宜く我石を置くへし　若し放棄せば白石之を占領せん　故に生は何處迄も日本の爲め此目的に向て勇往し少くとも當初決定せし五年間の約定を履行せん事を期するものなり　然らずんば從來の經費、時日、調査等全く水泡に属せん事を俟たず　抑も北清局面來た如何了結すへきやを断定しかたき今日に際し此僣歸朝せんか或は恐る安輝進藏の志望と從來の關繫とを知らざる者漫然之を以て不急迂遠の事となし中途にして阻止せらるるか如き事あらは是れ夷に功を一簣に缺く所以にして獨り安輝一人の遺憾に止まらざるへきを　於是山崎杭州領事を介し去十月十五日を以て電伺の結果支那に在留するを許可せらるる

に至れり 査するに西藏道路の開道は毎春三月以後にあれば既に駐藏大臣と交渉の結果幾多の準備をなすを得たれば来春は必ず進藏すへし 而て發程する迄暫く世人の注目を避け上海附近の田舎に隠遁し其間上海に於ける洋書及び藏地に關係ある傳教師旅客等に就き豫め調査をなし尚ほ傍ら更に支那語をも研究する事に決心致候 前陳の通り生は飽迄最初の企画を遂行せんと欲する者なるに因り本省に於ても勿論五年間繼續の約を變更するか如き事なかるべきを確信致居候（傍点原文）

右生か支那在留の可否に關し電伺に及びたる事情具申致候 謹言

明治卅三年十月卅日

成田安輝 敬具

外務大臣 加藤高明殿

四、成田西藏探検行計画成立の経緯とその動機、目的など

この一文を読むと当時の成田の心境が可成り良く判る。この年（明治三十三年）の六月、重慶を出発した成田は、成都で、西藏へ赴任途中の駐藏大臣慶氏に面談して、彼を一行の中に加え、拉萨まで同行して呉れる様頼むが、拒絕される。（詳しく後述）しかし、西藏語を話す一支那人商人が案内人として同行する事を承知する。そこに山崎領事から成田宛て「直ちに引揚げよ」と言う電報が来て、成田は進退に困り、外務大臣の指令を仰ぐ事となったのである。しかし、成田には帰国の意志が無かった事は明白である。それどころか「前年来、當路屢々更迭ありしを以て、或は最初事の成立を明にせられず、……單に速成の望なきを臆断せられ、中道にして此企画を廃絶せ

らるるの詮議に：「非ざるかを疑ふに致れり」と述べ、西藏開放の重要性を強調し、引き続き、成田の西藏行計画成立の経緯を次の様に説明している。

「そもく、最初に、この西藏探検行に賛成して呉れたのは、小村現駐露公使が次官だった時の事で、当時は政府も其の（西藏探検調査の）必要を感じ、適当な人物を捜していたが仲々見つからず困っていたと言う。この計画に参画したのは大隈、樺山、西の諸氏である。大隈氏が大臣（外務大臣の意）であつた時にこの計画を提議し、西氏が外務大臣になった時、承認決定された。この計画はその目的達成が容易で無い事を考慮して、（私、成田は）この計画が五年間の継続事業ならば承諾しよう、内閣の変動その他の理由でこの計画を途中で中止する位なら、依託された西藏調査の責務を果す事が出来ないで最初からお断りする、と辞退した所が、小村外務次官は、君の言う通りだ、外務省も又、途中で探検行を止める様な忍耐力の無い者には依託しない、と答えた。数日経って、小村次官と面談した際、次官は、西藏探検行を五年間の継続事業とする旨を、ちゃんと記録所に登記したから心配無用だ、と言った。そこで初めて、（私、成田は）西藏探検行を承知して引受けた」と。更に「せめて同洲、同教、同種の西藏を支那同様わが國と密接な關係を持つ様にする事が出来れば、わが國にとって得策である。これはわが國人の爲すべき天職であると、私は主張して憚らない。……然し明治維新前の高山彦九郎の場合同様、私の説に耳を傾ける者はいなかった。私の如き者の言う事を取り上げ扶けて呉れる者は誰も居ないと思つたのに、流石、卓絶した識見を持つ外務本省が私の主張に賛成し援助を與えてくれる事になり、この運動を推進する事となつた」と言う記述がある。

又、もう一つ異なる文書に、成田の西藏探検行計画の成立当初の経緯に触れた個所がある。それは明治三十四年

五月三十日附、成田安輝から外務大臣加藤高明に宛てた「進藏に就き外資補助を請ふの可否伺」と言う文書である。その全文は後で紹介するとして、一先ずここにその文書の中から成田の西藏探検行成立に関係ある部分を引用すると次の通り、

「世界の未開地の探検、開拓、未開人の教導、製造原料の探求、商路の創設、未開地への移民、勢力移植、宗教拡張等が欧米人の専有権の如き形勢を論じ）此緊要なる進取敢爲の經營と元氣行爲に至ては之に着目する者少く依然小島根性退嬰主義なるを慨し區々の軀剪劣を顧みず我と同洲同種の佛教國閉鎖國支那西部の最要藩塹、露人の最も垂涎する廣漠たる西藏高原に向ひ先づ探検を試み以て警告する所あれば異日卓識の士興起して之か極に當り東亜の時局に少補なしとせんやと辞官以て當路の士に計りしに幸に大隈、樺山、西、小村、福島諸君の賛成を得外務省の保護に因り、卅一年以来渡清し、本件に焦心苦慮するは從來の報告に因り既に了知せらるる處たり」と。

以上の記述によればまず成田が西藏開拓の意義に着目し、後で外務省及び陸軍參謀本部關係者が彼を支援したと言う事になる。しかし、成田がこの西藏探検案を先ず陸士同期生、陸軍先輩に示し、彼らの仲介で外務省の支援を得るに至った事は充分考えられる。又、「西藏を支那同様わが國と關係を密接にせしめん事わが國の得策なり」「平和と正當なる手段とを以てわが商業區域と移民區域とを拡張し國勢伸張を籌策せざるへからず」「今の地球は一大棋盤の如し……西藏の空地宜くわが石を置くへし、若し放棄せば白石之を占領せん。」などの記述は、成田西藏探検行の動機や目的のある程度示すものと言える。従つて、從來、不明とされて来た成田西藏探検行の動機、目的、計画成立の経緯に関する解明の手掛かりは前述の部分にあると言える。大隈重信は第二次松方内閣（自明

治二十九年九月十八日至明治三十一年一月十二日の外務大臣（明治二十九年九月二十二日就任）であり、西徳二郎も同内閣の外相に明治三十年十一月六日就任している。樺山資紀（海軍大将）同内閣内務大臣は成田と同郷の鹿児島出身で明治二十八年から台湾總督の職にあつた、小村寿太郎は同内閣の外務次官であつた。單騎シベリア横断明治二十五（二十六年）で有名な福島安正（後、陸軍大将）は日清戦争後、台湾授受交渉に参加したが、この当時は参謀本部に居たのではないかと思われる。

五、成田、駐藏大臣と面会、同行入藏の可否を交渉（成都に於て）せし件を報告

第壹号

明治三十三年十一月二十二日接受 機密受第三五一〇号 總務長官内田康哉印 主管政務局 石井印

進藏の儀に就き駐藏大臣と交渉の件

西藏は現今尚ほ閉鎖國にして外国人の進入を拒絶し交通を遮断す 特に其四境山を繞らし道路危險交通困難なるを以て廿世紀の今日猶ほ鎖國の迷夢を覚破せず 我と同教同種同洲中に在て最も悠然たる一国なりとす 進藏に就き安輝三策を画せり 上策は支那官吏及有力喇嘛僧の公許を得日本人として公然進入するにあり 然る時は進藏後上下の間に来往し 我國の好意を通し公然仕事をなし得るの利益あり 中策は知れども識らざるか如く殆ど黙許を望むなり 元来日本人は入藏せしむるも妨けなしと思考するものあらんも中央政府及列國を憚り公許せされども支那人として私に進入するは黙視し置くの気味なきにしもあらず 然る時は達頼喇嘛或は重要喇嘛に面語する機を得るに致らん 下策は上中二策を試み行はれさるの曰 支那人として秘密に進入する

なり 然る時は彼の地に於て公然仕事を爲す能はず 日本人たる事を悟らるるの日は如何なる障害に遭遇する未だ知るへからず 下策を取るは何時にても容易なれとも不利なるを以て先づ順序を逐ひ上策より試みんと欲し嘗て書を以て北京公使館に敬托せし事ありしも今春に至り北京方面は理藩院始め好適の手掛りなきに付き其地に於て適宜に取計ふへき旨の回答に接せり 爾後未だ幾らもならずして新任駐藏大臣 慶善氏成都より赴任の途に登らんとするの好報あり 則ち懇請の上山崎領事及夏道台より特惠を蒙りたる別紙紹介書を懷にし式の如く領事館に出発を届け六月廿日を以て重慶を發し陸路十一日程にして七月二日成都に到着せり 着後北変に就き人心の意向に着目し旁ら人を介し該紹介書呈出の可否を私に探り八日に至り別冊第三号信を紹介書に添へ送呈せしに翌九日午前十時に面會すへしとの回答に接せり 翌日衣帽を整へ期に臨み彼の邸宅を訪問せしに慶大臣は礼帽を頂き衆人に擁せられつつ大客廳外に出迎せり 其の容貌を一見するに古稀を踰ゆる二三、白髮中幹の一老滿洲人にして眼光面相自ら老而益壯なるの氣性を顕はせり 席定まり互に普通礼辞の交換終り對談の要概略左の如し

慶氏貴志の良好なるを知りしか今日相見るを得るを喜ふ 元來貴國と弊邦とは同種同文の國なるを以て深く相親交しつゝありしに前年朝鮮の事より遂に不幸を見るに至りしは惋惜（原文）すへし 今後は再び如此き事なく人々相親交せん事を切望す 閣下（支那にては往々普通に閣下を稱す）今回俱に入藏希望の由なれとも之れ頗る難問に属し^{第一}一人にては未だ之を決する能はず

成田現今世界中に於て、尤も愍然たるは西藏人なり 其旁に睥睨するものあり勢及々（原文）たるも唯念佛を称ふるの外他事を知らず 如此にして放棄せは或は恐る緬甸安南の轍に陥らん事を 且つ同教同種の故を以て一た

び其地に遊はん事を希望する久し矣　今や夙に芳名を欣慕するの閣下其地に赴任せらるるに際会す安輝若し冀尾に付して入藏するを得は豈一人の幸のみならんや

慶氏貴意の嘉賞すへき之を認知するも如何せん　嘗て自ら藏地に在て從來外人の進入を禁止するを知りつつ今赴任するに当り外人を同伴せは風氣未開の彼等必ずや物議を生し信を達頼喇嘛等に失し職責を尽す能はざるへし故に着任後先つ副大臣及達頼喇嘛等に協議するに特別入藏許可の件を以てし来年三月以内に返信を送呈すへし成田貴意辱けなし　然れとも安輝亦夙に之あるを慮り他人の注目を避くるか爲め貴國の風を装へり　且つ渝城(重慶の事)に遊ぶ既に二星霜を経たり　言語文字普通之を解すると同種の故とを以て毫も貴國人に異る事なし又重慶を發するや外國人に秘せり　當地に来るも未だ他人に面會せず　以て私に隨行を許さるるの便宜に供せり　請ふ　推察を垂れ之を許諾せられん事を

慶氏去春閣下及六、七名の貴國人相前後して打箭鑪に來れり(本願寺兩僧及井戸川大尉一行)貴國人の西藏の爲め力を用ひ財を費す既に少からず　閣下の志は既に他意なきを知るも今回同行するを得ざるは前陳の次第誠に不得止なり　請ふ諒察せよ　然れとも來春達頼喇嘛承諾の報に接し閣下入藏後　舉動我同種の爲めに誠實なるを認むるときは三年の後帰朝せし際皇帝に奏上すへし　然らば閣下の名譽なるへし　然れとも貴國現在頻りに英國と親交す　英は印度より藏地を覬覦(原文)し屢々人を派し其の事情を探らんとするも意の如くなる能はず　故に貴政府に代探を請ひ貴政府閣下に命し窃かに藏情を探らしむる内情なるやを疑へは即ち疑はざるを得ず　然れとも萬々此事なかるへし

成田皇帝云云の好意感謝に堪えず　然れとも思はさりき閣下にして此疑念あらんとは　仰も去春我國人の打箭鑪

に來遊せしは佛教視察の両僧及觀風遊歴の井戸川大尉のみ皆他意あるにあらず 而て弟は劉軍糧府と数次會談
両僧の來遊に就き豫め保護を請ひ弟入藏の志望をも通せり 我國人西藏に遊はんと欲するの意 他邦人と異なる
を諒察せられん事を 又我の英と親交するは北露に對し均勢を保たんか爲め年來露を敵視する英に親交するの
み堂々たる獨立國を以て英の使曠を受け西藏を探検するか如き我か日本帝國にあらず 英又之を我に依托す
るか如き愚拳をなすものならんや 弟か旅行の經費は西藏扶植に意ある同志者より供給せるは重慶人の既に知
る所 固より辯を俟たす 弟か志は閣下既に之を知る復多言を要せず 然れとも閣下に奉呈せんと欲し遠くも
たらせし日本古刀あり 若し判然英に通するか如きあれば此刀を以て問罪に遭ふ固より甘んずへし
慶氏前言英云云は比喩のみ 固より貴國及閣下を疑ふにあらず 來春三月内には回答を送るへし 又入否の事未
た確定せず故なく寶刀を受くるの理なし 願くは明日一見せしめよ

成田則ち其好意を謝し翌日日本刀を贈呈すへき事を約し相揖禮して辞去せり

翌十日別冊第四号信を添へ日本刀を贈呈し前日談話の証言を得んと試みしに其回答第五号信の如し 十一日
午前慶大臣の刺を通し前日訪問の返禮として代人來訪せり 大臣にして無官の一旅客に對し如此優禮を爲すは
支那特に僻遠の四川に於ては殆と稀なりとす 惟ふに前日日本刀を受けざるは謙遜せしか故ならんを疑ひ別冊
第六号信を添へ再び送呈せしに第七号信の回答あり 且つ贈るに西藏仙香及自筆文天祥正氣の歌を書せる美扇
を以てせり 越て十七日早朝非常の大風雨を侵して慶大臣は西藏行の途に登れり 諸官群友行を送り南門外數
町の地にある武侯廟（諸葛孔明の廟宇）に至り告別するを例とす 此日天候如此なるを以て送行者少なし 人皆
言ふ是れ官曆に依り豫め出發すへき吉日を卜定せしなり 故に風雨を以て延日を不吉と爲すと 又北変あるの

故を以て久しく打箭鑪に逗留するやに聞けり 日本刀は既に辞して之を受けず 成都に於て物を贈るの不可なるを察し其出發の翌日打箭鑪地方長官劉軍糧府に宛て五連發短銃及彈丸二百發に添るに別冊第八号及第九号信並ひに張之洞派遣員我教育視察の復命書なる東瀛學校拳概壹冊を以てし必受を期せり 第九号信商定を付送せし底意は固より彼之に調印するへしとは思考せざるも 大勢に不明の彼か英云云の嫌疑心と入藏を公許せば其職務を失はん事の畏懼心を幾分か消散せんか爲め此商定を列記し以て公正なる心事を公表し他日入藏の日萬一彼の覺知する所となるも意志既に彼に通達するを以て前陳中策を行ひ得へきの補助となるべく豫め配慮を爲せしなり 此事交酬なりし際 紹介状受領すら尚旦つ疑念せしに面商を得て他日の爲め此一準備を爲すを得しは好結果と言ふも可ならんかと存し右交渉の大要具報致候也

明治三十三年十月三十日杭州にて 成田安輝 敬具

外務大臣加藤高明殿

六、成田、駐藏大臣協定文

成田が明治三十三年七月九日、成都で西藏へ赴任途中の新任駐藏大臣慶善と会見して同行を要請し、拒絶された経緯が右の報告文で良く判る。興味深いのは慶大臣が、印度から西藏を窺う英國が思う様に成果が擧がらないので、同盟國である日本に西藏調査を依頼し、日本政府は貴方を派遣したのであらう、と成田に迫る言葉である。当時清國側がこの様な眼で入藏を志す日本人達を見ていた事が判り興味深い。

七月十七日慶大臣は成都を出発西藏へ向うが、成田は、西藏國境近くの打箭鑪の地方長官劉氏（旧知、懇意）氣

付で、慶大臣宛て 五連発短銃と弾丸二百発を前記報告末尾に出る「第九号信商定」と共に送りつけている。その「第九号信商定」と言うのは左の様なものである。内容は、駐藏大臣としては到底、承諾出来ない条項が含まれており、協定文と言うより成田の希望的諸条件を並べたものである。

商定

一、成田安輝安全に西藏内に居住又は旅行し得へき趣意に基き慶駐藏大臣と成田安輝との間に左記諸条件を商定す

一、来春三月以内を期し必ず入藏諾否を重慶日本領事館宛にて成田安輝へ回答せらるへき事而て入藏許可の後協定する事如左

一、駐藏大臣保護監督の下に拉薩に居留する事

一、場合により駐藏大臣衙門内に居住するも可なる事

一、出入共に大臣派遣の人を伴ふも可なる事

一、使僕も官撰の者を用ゆるも可なる事

一、日誌旅行記は漢文を以て之を書し要求に應し一覽に供するも可なる事

一、猥りに西藏内より退出を命せしめざる事

一、大臣の請求に従ひ達頼喇嘛推薦の教師に就き西藏言語文字を研究する事

一、書信の取扱を官に依頼する事

一、金銭の送届けを依頼するも可なる事

一、若し相互の間に疑はしき事あらは面議眞疑を判する事、猥りに他言を信し事を臆断すへからず

一、判然不正の行爲あるときは適當の責罰を受くへし

一、此商定は猥りに變換すへからざる事

一、此商定は調印後六ヶ月若くは一年以後に於て相方合意の上商量變更する事を得

一、此商定は二通を書し記名調印の上相互各々一通を所持すへし

以上 光緒 年 月 日 姓名 印

明治 年 月 日 姓名 印

七、前記報告添付の書信寫し

第壹号 慶駐藏正大臣と往復書類寫し（山崎重慶領事より夏重慶道台に送りて生か爲に慶大臣に紹介書を與へ

られん事を求むるの書）

夏觀察大人閣下、如覲敝友成田安輝賦性耿介、立志高潔、痛憤東亞之不振、殷念時局之有補、益亦仲連一流之逸士也、此公夙有游藏之意、來寓貴邦、前在東川書院修學、後自開館教習日英兩國之文字、渝之名士交游者亦頗多、凡此等情節、諒又在閣下電燭之中矣、現擬晋省 趨謁

慶藏帥、披瀝肝膽、以遂平生之志、側聞慶帥春風態度、齋月襟懷若攢左右、俾之一盡其所欲言、則非特此公一人之幸、想賢主嘉賓、定當款洽也、惟藏師崇階、晋謁莫由、倘荷閣下隆情、手翰介紹、俾敝友帶去面呈、則此公之喜可知、而弟亦感同身受矣、屑煩神容、當渥謝、崑此拜託、即頌 日祉 名正肅

明治卅三年六月十六日付

第二号 夏道台より生を慶大臣へ紹介せし書

大人閣下、敬肅者、月前恭迎 節鉞得遂瞻依、悵驪賡之匆匆遽 實驪企以難名、敬惟 續重三台 釐延八

座 蜺旌在望、馳慕良殷、茲接日本

山崎領事函稱其友成田安輝久仰 鴻猷、未欽 駿采、現擬赴省晉謁、屬、爲致書介紹、爰將來信鈔呈 督覽、其人習於中國語言文字、而又留心時務、極欲傾懷吐款、敬候

卓裁、專肅虔請 崇安伏乞 垂鑒 謹肅 計鈔呈來函一紙

附記七月七日第三号と共に呈出せり、第一号及び第二号は同封して信筒表書如左裏面白紙 第三号信筒表書亦之に同し

欽差駐藏大臣 慶大人 鈞啓

第三号 謹奉書 卅三年七月八日紹介書と共に呈出

駐藏大臣慶公閣下、未接 嚦咳仄聞 閣下寬仁大度 又頗明晰時務 故 大命選拔、當西陲欽差之大任矣、竊欣其得當、一抒 左右而欲陳述所志、有所請安輝曾遊美國、益慨東亞之不振、特憐藏人深自固鎖、唵佛之外復不知他、睥睨其旁者最可畏、是欲一遊其地、理由之一也、西藏我西疆之藩屏也、藩屏如今日、恐遂有越牆而來者、是誠可恐也、即欲一遊其地、理由之二也、導之未開、進開明、是先覺者之天職也、由來藏人非眞野蠻、

苟文教技藝之教育得其當、武備財政之政度、得其宜、使之進於文化、而充其富盛之度、且斟酌西洋植民政策、而實施之、則可畏可恐之憂患可除也、是爲我頗要研窮、即欲一遊其地、理由之三也、而以上之諸件一仰

閣下之高庇指教、待命研窮之、特入藏之件若得附隨 閣下一行之驥尾、而進藏、大幸不過焉、安輝懷此志、而在渝既二年餘、畧通重慶土音、且以同人種之故、容貌與中人相同、倘荷 特別佑護、同於中人而賜許隨行、豈一人之幸而已、當粉骨碎身以盡爲所懷不能悉書、幸賜間暇、得進謁、不勝懇願、伏冀垂仁俯允、肅此頌 榮祺 名正肅

另呈上、去歲奉

奎制軍之書草、併夏觀察介紹書一紙、又安輝懼以異邦姓字、啓一時之疑、故特易姓爲陳、并敬奉 聞、現寓在北打金街萬有官店

附記 第一第二第三号信を送呈するや其當日晩景慶大臣人を派遣し刺を通して言ふ、別に返信を送らす、委曲は明朝十時足勞を煩し面晤に譲らん事を請ふ 云々

第四号 大人閣下、昨辱蒙 寵招、拜聴 懇篤貴諭、不勝感激、然退而自想、有可喜可悲者、乞述之、至益發奮爲東亞可竭忠愛之誠、其成績如何、可爲 奏上於 皇上

殊遇之言、凜乎感銘於心肝、不知所謝、是可喜者也、敵國之士風、尊義重然諾（中略）安輝雖不肖剪劣行至誠而已、豈有受人之命云云之事哉、推現今而達觀西藏之前途、誠有可最惑者、而無着曰敢爲者、故先爲我見義而

起耳、豈有他哉、夫猶天賦之兄弟姊妹、猶他人、讀孔孟之書、講道者、何事爲代他人陷兄弟姊妹之不道、若有之、則國人自將不恕之也、閣下未深知不肖赤心、是可悲也、然竊敬服欽慕於小心用意、唯自誓萬無此事、安輝辭漱城之日、并自來本地、未敢輕出是一爲

閣下、計事之鄭重也、垂推察、謹案開西藏之風氣、堅固藩屏

清國大皇帝陛下之希望、而又 日本大皇帝陛下之仁心也、而復我全體之志願也、安輝若有人云々之事、是反上下之志望、是豈安輝之意哉、請勿疑惑、伏乞賜許隨行進藏、遠來之鄙人、未精通京話 願 賜惠寫昨 貴教之大要數言、幸甚、茲恭奉呈日本寶刀一把及日光山名景攝影壹冊、并萬國交通圖壹冊、其他數件 賜笑納、爲大幸、肅此恭請 崇安、安輝頓首再拜

卅三年七月十日日本刀と共に呈送以て前日談話の証據物を得んと欲せしに其回答第五号信の如し

第五号（第四号の回答）

閣下居心甚佳容當推道隨藏一節、目時不可造次、昨已言之詳矣、承贈諸品、手披心領、謹收萬國交通全圖、以廣擴覽、餘珍璧 謝、附呈蓮米一包、聊申土儀、便希笑納、藉候 時吉、惟 照不緘 名正肅

第六号 大人閣下、驚獅窺藏、勢頗耽耽危急之秋、閣下拜欽差駐藏之大任、將臨其地、因獻以日本寶刀一把、以奉供 鎮藏之記念、贈名刀、古來爲厚禮、士大夫受之有名譽、無秋毫之耻、夫作此種之刀、刀工齋戒沐浴、不接婦女子、黎明起来、拜天地而後鍛鍊、所用之水、特選清冽、故重爲武士之魂魄、又或尊爲活人刀、此刀傳名家、屢經戰場有効、故存痕蹟、蓋三四百年以上之古物、比格刀身之長大、而其量甚輕、或傳名工國光之作、

有古人懸劍於墳墓者，此刀前日一度蒙辭退然不願再收納則孤負遠來之微意、併背反中日同志者之囑望、今閣下有天福接此寶刀、天與宜受之、受而爲永世記念、何不可是有哉、若笑納欣喜何勝、則附記再送之理由、俱數小品、更奉贈左右萬々不辭、不勝盼望之至、即頌 文安 名正具 七月十二日送呈

第七号（第六号回答） 寶劍以贈烈士、自古有之、今、獻日本之刀、供鎮藏之記、愛我良深也、既稱三四百年古物、請伐我佩存、以備臨用來取、緣此物不便入藏、免啓猜疑、附贈佛香、成友望、即晒納、此矣 時佳名正爾 七月十二日接受

第八号 大人閣下、曩賜親謁、告以入藏之事、抵拉薩商議之後、將送回答、

貴旨慙慙不勝感激、然道途遼遠公務繁多、或恐不便記憶、則茲記商定十五條、以供便覽、且表明公正之意、切望徵之於前日之教示、賜署名押印幸甚、安輝豈好學囚人哉誠不得止也、願推察、前日 閣下所見疑、我政府或不肖安輝爲英云々之言 請休憂慮、伏惟我

天皇陛下夙賜憂我■■■之不振、前途之不容易故至其利害得失、不問地在東西南北均被勞

賢慮、國民亦體其意、假令今日親交英國、堂々獨立國、豈何事爲英之驅使犬羊、而賣■■■可憐之藏地藏人者哉、親英者、對俄保均勢、欲以維持亞東之平和耳、藏地去我遠、我欲入其地、必不可不經過他國之境域我何愚者、豈有野心哉、不待識者而明也、昔者有利用遠人、以攻近邦者、智者宜知所爲也、夫先覺者、有嚮導■■■、保存■■■之天職、是天道也、天道者、欲以人力拒之遂不可得也 閣下通時務、信道篤、愛種深閣下之盛情如何、他

日特筆以表明天下、臨別呈商定及一言、以求安閣下之意、且奉贈護身五連發短鎗以壯遠征之情、并送呈東瀛学校舉業壹冊、晒納爲幸、成田安輝 頓首再拜

附記 七月十九日成都より托人打箭鏢に送り劉軍糧府を経由して慶大臣に呈する事を請へり（文中の■印は墨で黒く塗り潰してある伏せ字）

九号（前述の商定）

八、駐藏大臣慶善 赴任途上急死

成田が駐藏大臣慶善氏との接触を求めて色々と苦心した事情は前記報告や書翰で良く判るが、それらの努力も結果的には水泡に帰して終った。その理由は西藏へ赴任途上の慶善氏が急死したからである。その死も単なる病死ではなく憤死とも悶死とも言ふべきものである。その経緯は次の文書で明らかにする。

明治三十四年一月二日付、在上海、成田安輝より加藤高明外務大臣宛て書翰

「駐藏大臣、別に新任の理由並に西藏人の支那官吏に對する感情一般」

査するに去る十月中、四川永寧道台安觀督は新に駐藏大臣に任せられ藏地に急行すへき命を受けしも、其前後、今日に至るまで旧駐藏大臣慶善の事に就ては何等の欽命あるを見ず 右慶大臣は既報の如く 去夏七月九日成都に於て進藏の件に付き生の親しく面議せし人なるを以て利害の關係する所尠からず 即ち、成都に飛書せし結果左の報導に接せり。

慶公進藏の途次、巴塘に至るや藏人烏拉^{ウラ}を給せず（烏拉とは藏語にして我駄馬の如き制なり、古来支那官吏の来往には無賃にて之か使役に供せしむるを例とせり。）無情の行爲をなす。公怒りて其二人を戮殺す。是於て藏人蜚集する事萬余之を圍む。公發書して急を四川總督に告ぐ。總督復信に言ふ。今や北方多難なるを以て兵を發し往きて公を獲る事尠とす。宜しく自ら便に隨ひ辨理すへしと。公得るに此書を以てせしより遂に鬱々として死去せり。想ふに老弱の身此の事ある敢て怪しむに足らざるなり。則ち現永寧道安觀督（滿人）駐藏大臣となり成綿道台張は永寧道に轉し、成臬知府劉星源は已に成綿道台に榮升せり矣。回顧すれば。去夏。慶大臣發程の當日は稀有の暴風雨なりしも既に官曆に於て最上吉日を撰定せしとて風雨を侵して發せしも其結果如此追悼の至りに堪えず。從來清官の藏地に往來するや糧台に加ふるに藏人往々此の無情を行うあるを知る。今や進て最高官の大臣に及ふ。藏人遂に支那の束縛を免れんとするか。何それ亡狀なるや。敬報

巴塘といえは、楊子江の上流、金沙江の東岸にあり、まだ清朝領土内である。対岸以西は西藏領土である、日本人僧侶寺本婉雅、能海寬もこの巴塘から涙を飲んで引返している。明治三十三年当時の巴塘に於ける情況を寺本婉雅は「蒙藏旅日記」（七七頁）の中で次の様に述べている。「巴塘軍糧府に至り、糧台武文源に面し、入藏の旨を通ぜしに、彼は直ちに承諾し、且つ烏拉及び護送兵を給する旨を告げき。……しかるに後に至りて土司余等に告げて曰く、烏拉を給する能はず、外人の入藏は好ましくならず……還るを諾せば烏拉を出さん、と。進まんとするも烏拉なし駄馬なし。」更に一ヶ月を経て、西藏側役人から洋人二名（寺本、能見）の入藏を拒絶する書狀が到着している。寺本等に烏拉の支給を断つたのは清朝側の巴塘軍糧府である。しかし、この軍糧府が西藏領土内の旅行に必要な烏拉支給権を持っていなかった事は明白である。駐藏大臣慶善氏は西藏旅行に必要な烏拉の支給を、

従来の慣例に習って西藏政府派遣の代表（満康僧俗代表^{マルカム}）に要請したものであろう。そして西藏側は口実を設けて烏拉の支給を遷延した結果が慶善氏の悲劇的最後となったものであろう。清朝政府の威勢の衰えが良く判る話である。西藏側の記録によれば、一九〇三年（明治三十六年、慶善氏急死の三年後）にも、西藏へ赴任途中の駐藏副大臣 Feng-chien と附添いが、この田塘でラマ達に殺害された。（TIBET Shakapa p.224）殺害の原因は、副大臣がラマ達に寺院に於ける遊惰な生活を止めて、生産的農業をやった方が有益だと述べた事に対しラマ達が憤激した爲である。烏拉（ウラー又はオラー）と言う言葉は満州語、蒙古語、チベット語にそれぞれある。本来は、正式の権限を持つ者が公用で旅行する時、民衆の馬その他の家畜を乗馬用又は荷物運搬用として徴発する行爲又は制度を意味する。一、二〇〇年代に書かれた元朝秘史に既にウラーと言う語が出ている（巻十二・二八〇節）、チンギス・ハンの後継者オゴタイ・ハンが駅伝用の乗継馬制度を制定した部分である。語源はチュルク語（古代トルコ語系）で中世蒙古語では *ilaga* の形で使用されており、後、*g* 音が脱落して *ulaa* となったものである。

九、成都より上海までの成田の旅費請求と精算

機密受第三五六四号 大臣 高明印 總務長官内田康哉印

重機第三号

成田安輝今回成都より上海迄帰着の旅費請求書別紙傳達方同人より申出候に付茲に及通呈候 同人の旅中日當に關しては從來同人に對する待遇振りに照らし可然御處置相成候様致度此段併て申進候 敬具

明治三十三年十一月十五日 於杭州

外務大臣 加藤高明殿 在重慶領事館事務代理 山崎 桂

欄外に「要詮議」の書き込みあり

旅費請求書

去る八月十九日四川省成都府滞在、慶駐藏大臣と交渉中日本に歸るへき電命に接せし以来 成都出發上海を經由し元重慶領事山崎氏現任地杭州まで到着電伺の上支那に留まるも可なる旨電命に接せし迄の経歴書及旅費計算書別紙の通に有之候 右は進藏以外の経費に付御下附被下度奉願上候 且又其御序を以て上海より成都まで再上行の経費をも（從來重慶上行者の旅費御参照の上）特別の御詮議を以て豫め御下附被下時機を見て適宜再発の便宜御授け被下度は亦懇願仕候也 明治卅三年十一月十日 成田安輝

外務大臣 加藤高明殿

経歴書

卅二年八月廿日成都解纜八月十七日日本に歸るへき電命に接し同十九日乗船せり

全廿二日嘉定到着 全廿三日嘉定解纜 全九月二日重慶到着 全九日重慶解纜重慶より漢口直行支那船に搭乗す七日に乗船せしも大雨激水の爲め九日に至り解纜せり 全十九日宜昌碇泊 全廿四日宜昌解纜 全廿五日沙市碇泊 全廿六日沙市解纜 十月四日漢口到着 十月十日漢口解纜 全十二日上海到着 即日杭州に向ひ出發、十三日夜杭州城外拱震橋着、十四日杭州城に到り我領事館を訪ひ元重慶領事山崎氏と面商、十五日在清希

望電伺、十七日許可の電令に接す 總日数五十四日 成都出發より上海到着迄の日数事実如此、若し不都合の件あれば適宜御減算可被下候

右之通 明治卅三年十一月十日 成田安輝 敬白

旅費計算書

一、邦貨 七圓六拾九錢三厘也但し六五換へとす此四川銀五兩也 但し成都、嘉定間支那船雇賃ナイル

一、邦貨 參拾圓七拾六錢九厘也 同上 此四川銀貳拾兩也 但し嘉定、重慶間支那船雇賃

一、邦貨 壹百円也 同上 此四川銀六拾五兩也 但し重慶、漢口間支那船雇賃

一、邦貨 參拾壹円八拾錢 百弗に付邦貨百六円換へ此墨銀參拾弗也

總計百七拾弗貳拾六錢壹厘也 總日数五拾四日

右之通 明治卅三年十一月十日 成田安輝 敬具

明治卅三年十一月廿八日起草同年十二月四日發送済印機密送第七号 總務長官内田康哉 會計課長三橋主任
武田印

杭州副領事山崎桂殿 外務大臣 加藤高明

成田安輝成都より上海迄歸着に係る旅費の儀に付十一月十五日付重機第三号を以て本人請求書相添御申越の趣了承 右は別紙の通本人請求書の実費船賃并日當共合計金四百四拾圓貳拾六錢壹厘の高 機密金より支出し

中央金庫を経て貴官宛及送金候間本人へ交附の上 領収証書を徴し御差越相成度此段申進候也

欄外に「小村公使次官たりしとき約定云々成田來信中に見えたり果して然るや取調を要す」の毛筆書き込みあり

成田安輝成都より上海に至る旅費

一、金百七拾円貳拾六錢壹厘 但し成都より嘉定、重慶、漢口を経て上海に至る支那船雇賃実費（本人の計算書に依る）

一、金貳百七拾圓 但し明治三十三年八月廿日成都出帆の日より十月十二日上海到着まで日数五十四日分當壹日五円の割（現行事務員留學生旅行日當に依る） 合計金四百四拾円貳拾六錢壹厘

（成田の右金額領収書省略）

十、成田、四川總督に日本勸業大博覽會への参加を勧誘

（明治卅三年十一月二十二日接受、機密受第三五二二号 總務長官内田康哉 政務局石井 通商局若松印）

奎總督へ上書及勸業大博覽會に關する件

先般成都滞在中打箭鏹宛て慶駐藏大臣に書簡、商定及短銃を贈り其返信又は受取証の到着を俟ちつつあるの際 時日を空費せざる爲と西藏諸件の交渉に干與する事ある四川總督に上書し我國の好意を通し置くは生か入藏に就ても必要なる事と信し別紙の通り上書中の第一節に丁提督派遣以來支那特に四川と益々親密ならん事を欲するは我國人一般に望む所なる事を言ひ 第二節に若し来る勸業大博覽會に出品せらるるに於ては大に相互

の利益なるを以て内密に内意伺ひ度きを述べ 第三節には在重慶の我領事及井戸川大尉は共に東亜の前途を憂ひ東亜の爲に尽すべき人なる事を示し 第四節には日清利害を同ふうするを以て日本は支那の保存扶植と富強開明を切望する事を表はせり 又從來滿州大官中には露國を誤解して瞞着せられ歴史その他の事情に通させる爲め己に有利なる國と考ふるものあるを以て其迷夢を覺さん事を欲し贊考として別紙俄國事情一本を添呈する事となし四川洋務總局季勸察の私邸に赴き私に別紙を奎總督に奉呈せられん事を請ひ 且曰く博覽會の事に關しては大に相互の利益ならん事を信するを以て若しも萬一我政府より之に關し出品を請ふ如き事あれば之に對する總督の内意如何 豫め漏聞せられん事を若し之を諾せらるるに於ては我當局者は他日公然之を請求せらるるに至る事も或はあるべきかと信す 敢て依託を受け之を問ふにあらず 區々の意勉めて兩地の交情密ならん事を欲し特に内意を密示せられん事を願ふに、李觀察聞て大に喜び即刻進達の勞を執れり、越て翌日總督衙門より歸途生か旅寓を訪ふて曰く 總督貴示を嘉納せり 博覽會の拳兩地の有無相通し商工を勸奨するの利交際を親密にするの益あり劉張各總督に於て之を諾するあるか川省素より當に之を承諾すへし之れ容易の事なり俄國事情は大に賞賛せられたり云云 即ち之れか証言を得んと欲し記憶の爲め其大要を記送せられん事を請ひしに八月七日付を以て別紙回答を得たり又總督幕僚江氏に就き探り得たる總督の内意も李觀察語る所と附合せり其他商務總局の意向如何を探りしも是亦贊同なりと聞く當日總督より出品の可否下問ありしを以て即時其可なる旨を答え置けりと、商務局員の說に依れば劉、張兩總督の聰明なる素より容易に之を承諾せらるへし云云商務總局員等宴を張り生を招待せんと頻りに迫りしも時節柄之を辞せり 亦以て四川の我に對する好意如何を知るへし 北變容易ならず、各地人心何となく動揺し、英米其他の居留民下流へ退去するに際し獨り佛國傳教

師等は一時下流地方に避け去るをだに欲せず 此の時に當り若し無智の民人蜂起し萬一傳教師等を殺害せんか 佛國は却て之を喜び謂へらく四川遂に我餌にかかれりとなし 印度の英に於ける如く遂に四川を掌裡に歸するか如き口實となるか如き事あらは噬臍及ふなし 宜しく時勢民情の如何を察し、一方に於ては庶民をして誤解なからしめ、又一方に於ては、場合により護衛兵を付し保護して以て佛傳教師等を下流地方に送出するの必要もあらん 御参考迄申置く旨總督に傳へしに之れ亦大に嘉賞を蒙れり、成都を辞去するに際し總督は其眞影一葉を贈れり 生又生か寫眞を呈送して告別せり

當時北變如斯、重慶の模様如斯、英米其他の居留民悉く成都を退還せしに當り一個の日本人として成都に残留しつつ奎總督及慶大臣等へ日本の好意を通し善後策の一助として博覽會の事に就き証言を得 又官民の好遇を得んは將來日本及四川の交際益々密接なるの媒介とならん事を切望に堪えざるなり 安輝謹て惟るに我日本は今後北變の和局如何に依り大に東亞大陸に向て我貿易を擴張させるへからず 之れか爲めには日清韓の大博覽會をも開設せざるへからず 然れども單に三國に限るときは露及其他の感情を書ふ事なしとせず 故に東部西比利亜も之に加ふる可ならんか 而て此挙に就き我の他に望むは我製造品を彼に紹介して買はしむる事、又彼の未製品或は原料にして我か製造に供すべきもの、及彼の嗜好如何に注意するの三要點なるへし 出品及來觀を勧誘する方便手段等に就ては欧米を斟酌し割引往復氣船券發行も亦可ならんか 各地に觀誘の事に至ては領事其他適當の人あるべきと信す 他日北變の時局平和に結了し我か大臣閣下は農商務の當局と協議し遂に我國か此事を実行するの一日あらん事を熱望致候

右奎總督に上書の趣意及博覽會に對する總督出品の意向并に鄙意御参考まで内々具申仕候

明治卅三年十一月六日 成田安輝 敬具

外務大臣 加藤高明殿

尚欄外に「萬一不得止れは我製造品の原料になるへき諸品を蒐集陳列を計る亦益なしとせず」の書き込みあり

四川總督への上申書の寫し

日本鹿兒島成田安輝謹再拜奉書

奎公制台大人閣下、臯者進呈芻言、猥蒙頒納、細流寸壤、超坳 海岳、幸甚幸甚、近以北變闐駘、全局震動、安輝重洋來旅 麾下、三易葛藟於茲矣、覩此勢、日蝟蟾切、不能不感激於同洲之誼、復爲 閣下瀆之

一、去秋曾經

鈞命、派員查察敵國陸海軍事及教育制度、我朝野知明之士莫不讚頌 宏謨、仰慕弗置、信書報格焉、新報表明焉 旦盼望四川日本兩地交際益蜜、凡日本之力能令有裨四川之件、無不仰承 顧問、致身靡惜、此敵國現今朝野之輿論也、

二、二年後、日本將立設勸業大博覽會、大賽會我外務大臣或農商務大臣或將請 派商務委員及巨商、攜帶四川特産之農工商品標本、行以查觀日本農工商務、可賣物則賣焉、可買物則買焉、可學物則學焉、可教物則教焉、有無相通、川日之貿易盛興起點於此必不可忽也、四川藥材、麝香、蠶絲黃金、烟艸、猪毛、羊毛、白蠟、漆、麻之類、日所需焉棉沙、東洋布、海產物、及各種洋貨、四川所需者正多、而不久運輸交通互相嗜好需要愈增、貿易愈進、彼此人民之便利、詎不大哉、蓋貿易者國々相親之媒介者也

三、新任山崎領事向在東瀛即欽慕 雅望、今來論、承之使職既代表日本安輝此次超候曾屬一將蟻意雖際隔 蜺

旌雲山千里、而未嘗不神馳 左右山崎君自少時既慨東亞之局、遊學 中國南北有年、後又官遊米國、學兼日、中、英、頗明通時務、爲人直實、此事如不久肅穆、秋冬之間、君或來省晉謁凡洋務及農工商各務其他之時務、若辱承 顧問、必乎誠實吐露赤心、以奉答、至武備之事、有井戸川大尉既蒙 賜謁数次、其可否之處 諒早入 憲鑒、安輝自幼与之作總角之交、知其夙憂亞細亞之不振、遂慨然習武事、凡有閱軍旅、無分大小、若賜下問、必應盡至誠

四、亞細亞之危、眞如累卵、此固中國之利害、亦日本之利害也、若中國亡、則日本危矣中國安、則日本安矣、而我之權勢、不墜地、理勢眞然、故日本現今朝野有識之士、皆希望 中國圖富強、奮然協力、以發揚、我之名譽如美國、許歸化、爲其國民至我退之而不允、是一大恥也、俄以旅順、大連開爲通商碼頭許出入、而則不与之、是二大耻也、判明其他之諸件、與相爭之端緒隱顯中既開始、是日本所以誠禱願 中國之開明富強也 世有乘事變甘言以奪人之邦土、其深意不掠盡之則不止、是豈同日可語哉、安輝非敢學蘇張之辨、以干 請聽、惟鄙念殷拳以大局是亟又素望四川兵備之強盛与富庶之增進者、故於來遊之次、呈一言以將區區之意、側聞 尊意欲即安輝前年、獻誠之件、俟北變靜謐、漸次實行、逃聽之餘、不勝敬服欽佩、伏惟鈞鑒

計呈俄國情況一本並微儀數端 卅三年八月四日總督呈出

欄外に「前年献誠の件とは学生派遣、教師聘迎、視察員派遣其他数件」の書き込みあり
文中の印は墨にて黒く塗り潰してある伏せ字

四川洋務總局李觀察よりの回答寫し

逕復者昨云 貴國將設博覽會、擬請川省酌派人員前往一節經由敝處、回奉 督憲面諭、沿海沿江如湖北兩江等省將來均派員前往、四川亦甚樂派員同往如各省均無派員、四川似碍難獨派、又川省物件鄙陋亦恐未堪充賽等因手此布復順頌

日祉 七月十三日

名正具

安輝先生大人台啟

右供劉覽候也 明治卅三年十一月六日 成田安輝 拜

外務大臣 加藤高明殿

附記

一、總督其他へ進呈せし書類は皆て重慶に在て生に従ひ遊學せし名筆一秀才なる某適々成都に留學し來て寫字を補助せしを以て其美觀遙に活版の右に出てたり

一、別に俄國情況の寫し一本を添呈す

明治卅三年八月四日四川總督奎樂峯翁へ閱覽に供呈せし一本の寫し

俄國情況（日本大和前衆議院議員森本藤吉著述 日本薩摩 成田安輝編輯 その内容はロシアの侵略的意図を強調し、日清韓三國の連合協力を呼びかけたもの、省略）

機密受第三五六七号 明治卅三年十一月二十六日接受總務長官内田康哉 主管 政務局石井 通商局杉村印

来る勸業大博覽會に付 四川總督奎俊氏内意通知書進呈の件

曩きに楊村攻撃の頃 四川省成都に在て總督に勸告するに明後年開會さるへき我勸業大博覽會に四川地方の産物を出品するは 相互の利益を増進するの佳挙なる旨を以てし其内意を探りたるに 之れ容易なる事にして劉張二總督管下出品するに至れば四川素より之に應するを嘉みすへしとて別封の通り回答に接せり 今回の變、和局畧は見込ありて萬一此事に就き公然交渉すへき場合に立到れば 此書或は証據物又は一参考物として御入用の事もやあらんかと存し茲に謹て進呈仕候也 明治卅三年十一月十六日 在上海 成田安輝 敬具
外務大臣 加藤高明殿

欄外に成田自身の筆で「當時成都巷街謠言すらく清兵連戰連勝し外軍頻りに潰敗す、又言ふ董福祥の一子大軍を率ひ出て日本に遠征す、台灣及償金の返還遠からざるへし、丁提督は日本より賄賂を得たり故に兵を率ひ北上するを欲せず云々」の書き込みあり

十一、成田、外務大臣宛て四川經營の意見具申

明治卅三年十一月二十八日接受 機密受第三五九二号總務長官内田康哉 政務局石井 阿部 通商局杉村印
四川省に對する刻下の準備

四川に對し、我か經營すへき事物は支那各方面に於けると同じく一にして足らず 曰く我實業の擴張曰く航路の延長曰く鑛物採掘權を得る事曰く居留地經營曰く領事館新築曰く文武の學生を我に留學せしめる事曰く我教師を聘備せしむる事曰く我武官を延聘せしむる事曰く学校の開設及布教曰く諸般の調査等毎挙に遑あらずと

雖とも四川に對し目下最も必要と成せるは鑛物採掘權要求、居留地経営、領事館新築の三事はなり

○鑛物採掘權を得る事 往古より巴蜀金を産し今尚ほ蜀金の名あり 其地を査するに古世期に属する廣大無限の赤色大砂岩盤上に■■■■豊富にして金、銀、銅、鉛、石炭、石油、天然瓦斯及山塩を産し就中鉄、石炭の如きは最も饒多なりとす 宜哉英仏既に鑛物の採掘權を得しや 故に我に於ても之に均沾して豫め鑛物採掘權を得置く事目下の急務なりとす 米領事の如きは陽に曰く我國内鑛物の採取すべきもの夥多なるも未だ着手せざるの土地尠からず況んや他國をやと 然れとも果して能く然るや否や 朝鮮に米人の採鑛するものあるを以て察するも確信する能はざるなり 四川に於ける官民中には日本は何故に均沾して鑛物採取權を得ざるの疑念を起すものさへあり 今年夏間成都に在ても亦此感念を有する者あるを見る 要するに我か所置如何に依り彼の惡感情を惹かすして迷れか許諾を得るならん 今や我れ遠慮辭讓するの要なけん 故に我に於ても亦佛、英に於て均沾し四川に於て鑛物採取を爲し得るの權利を得置く事を要す。新任重慶領事出發前歸京を命せられ大臣閣下より親しく此事に就き御協議ありて時機を見計らひ成都に前往し此談判を開始すへき特權を授けらるゝ可ならんと信申候 佛國の如きは前領事ハアス氏自ら之を談判し事成就の後自ら採鑛會社を創立し之れか社長となれり 遠からず四川に卜居すへしと言ふ、英國公使の補助によりて著名なる富豪ピッチャド・モルガン氏が北京政府より許可を得たるなり（■■■■は判読不能）

○居留地経営 重慶の我豫定居留地は珍田氏に依て撰定せられ附近に於ける最好位置なりとす 故に他人のこれに云々するものは時々聞く處なり、現に佛國亦之を要せんとせし事あり和局愈見込あるの日は漢口地方に於けるか如く支那人の名目を以て之を買占むるものなしとせず 左れはとて廣からざる居留地なりと虽とも

全體の買取は我政府現今の事情之を許さざるものあらん 唯其沿江必要の處凡五六十丈の地目下田畝なるを幸ひ田地の價格を以て買入れ置くは他の覬覦と他日の紛議を豫防するの好策なるへし 此地左右に船舶の碇泊場あり中央は天然の岩壁連りて堤防の用を爲し高からず低からず洪水ありと虽とも浸害を受けず

急に市街を爲すは易からざるも倉庫、製造所、別荘の建築等には最適の地なり放棄せは遂に他人の有とならん故に政府自ら責めては此小居留地中の此小部分のみにても買入れ置くか或は適當の我商人を勧誘して之を買わしめ置くの二策あるのみ 仮令我商店は重慶城内に開業するも倉庫、製造所、或は居宅地（當初より直に市街となるの見込なし）用として此地を維持するの必要あり 重慶近傍此地を置いて居留地に好適の地尠し又我居留地確定せはとて事實に於て居留地以外に在りて我か商業を営む能はざるの形勢は此地方に於て見る事能はず 換言せば居留地以外に於て我商業を営むも黙許の状に經過すへし 此事亦新領事赴任前親しく御協議あつて然る可く存認致候

○領事館新築 重慶に領事を派遣し置くの國を曰、英、米、佛の四ヶ國とす 他三國は既に洋風の宏壮なる領事館を建築し嚴然として各其國を代表せり 重慶全市の支那家屋其他之に對し遜色なきの借家一軒だもなし 一傳教師の家屋或は一技師の住宅すら巍然として高く秀るの洋館ならざるはなし 我領事館を置かすんは即ち止む 既に領事館を置く以上は多少他と均衡を保つべき事を欲して止まず 徒に虚飾を好むを勧誘するにあらずれとも高樓に寓するものと茅屋に住するものと相伍して事を議するに似んとするか如き奇觀を呈せば彼ら自ら驕傲ならざるを得ず 而て一方に在ては地方支那人の我を輕視するを免れず 自然外交上の損失を招き申すへしと存候 開港以来土地及建築價額次第に騰昂しつゝあるも現今重慶は他に比し未だ安位なるを以て土地買

入及家屋建設とも併せて僅々一、二万円を出てすして可なりの領事館新築の見込あれとも目下の状勢我政府は之れを爲すを欲せざるへし 左れはとて放棄せば我不面目なり 是亦有志力なる我紳商に勧告して土地を買入れ領事館を建築せしめ政府之を借受る如き手段を取る可ならんか 米國領事スミザアルスの如きは一昨年地價及建築の安値なる頃に数千兩の私費を擲ち高爽なる地を購ひ現今の立派なる二層樓洋館を新築し其内凡三室を領事署の事務室として好價を以て米國政府に貸附けり 日本にして若し此事あらんか

一種議員の囂々想見すへし流石は大國なり之を許して問はず 避遠の地に領事たるもの政府及國民は之を海容する何の不可なきか如し小事の末のみに走り議論に時を費すもの事物の進渉を見ず 國亦然り実行八分議論二分と奈破翁の言是なり 吾人猛省を要す 然れとも又一方を顧れば英國の如き事情に明通の議員多き國すら亦一弗毎に議員と争ひ之を出さしめざるを得さりしは英領事フレザア氏の実話に依り之を知れり 議會開会前に當り有名なる倫敦の画報中に支那風なる見苦しき重慶英國領事館を中央にし宏壯なる洋館の米佛領事館を左右にしたる寫眞石版面を印し其下に簡明なる説明を付し大に新築の必要を説けり 之れ公衆に刺撃を與へ新築費を無難に可決せしむる苦策中の上策なりしと言ふ一好笑柄と言ふへし 抑も重慶に於て各國領事館相競ふて宏壯なる建築をなせしは実に佛之れか魁たり 其建築の宏嚴なると構地の形勝にして廣大なるとは之を公使館と言ふも可なるか如し 米國の大都會に於ける領事館の小なるに比すれば此僻地に於ける領事館の過大なる理由なきか如くなれとも外交政署の理由は其なき處に存在す 然らば即ち我亦顧省する處なくして可ならんや 眞否未だ知る可からざるも佛國の此經費出途は余蠻子事件賠償金の幾分なりと我得て之を学ふへけんや 然れとも重慶に於ける各國領事館新築既に如此 我領事館の新築亦之を忽諸に付すへからず 是亦新任領事赴任前に

於て親しく御協議あつて可然かと存じ候

現に右三件の必要あり 新領事赴任前の歸朝を命せられ豫め其所置打合せを爲し置かれ候事緊要と存念致候
来春二月中旬頃までに日本を發せは重慶着まで水路好順なるへし 刻下急往すへきの必要他にあらはいさ知ら
す然らすんは右様御取計らひ相成る事國家の爲ならんかと存じ候

四川に在留する二年半餘 昨今下申し新領事の赴任を聴て欽ふと共に御参考迄私見具申仕候 鑛物採取權の
要求に就き詳細なる事は面陳にあらされは筆紙に尽す能はず 書外御諒察可被下候 謹具

明治卅三年十月廿四日 在上海 成田安輝 頓首

外務大臣 加藤高明殿

右の意見具申書は、特に四川省に於て日本が鑛物採掘權を獲得する事、重慶市内に於ける日本人居留地經營、
在重慶日本領事館新築の必要性の三点を論じているが、これらは何れも外務省出先の領事館員が取扱すべき事
項である。正式の外交官でもなく單に西藏探検の命を受けて途上にある成田がこの様な立ち入った意見を具申
し、而も鑛物採取權の件で詳細面談のため、一時帰国を要請している事に外務官僚がどんな感じを受けたか、
想像に難くない。

十二、西藏ラマ、モスコ―訪問關係

上海時代の成田は努めて英字新聞、華語新聞に関心を払い、西藏關係の消息や資料の蒐集に勵んだ様である。
次の報導は、アジア研究所紀要第八号掲載の本論文(上)二十二、ロシアとチベットの接近の項(77-78)に関連す

るものである。ダライ・ラマの特使アワン・ロサンドルジ（後年、ドルジェフの名で西欧諸国に知られた）が一九〇〇年九月、初めてロシア皇帝に会った時のニュースである。

明治卅三年十一月二十二日接受 機密受第三五一三号總務長官内田康哉 主管總務局石井印

露京に於ける喇嘛進貢状況伺

別紙にして若し事実候得者露政署上右喇嘛に對する待遇及西藏に對する意向如何を豫め承知致置度候間

秘かに御漏被下度願上候也 明治卅三年十一月六日 成田安輝 敬具

別紙 喇嘛進貢 ○昨接俄京來電云近有西藏喇嘛僧數名到俄京進獻方物呈於

俄皇按喇嘛僧向歸中國管轄每年進貢北京從未聞與他國交往今以方物進

獻俄皇豈因中國日今已失勢耶（一九〇〇年十一月七日附北清日報）

外務大臣 加藤高明殿

右の成田報告文書には大臣閱了印、總務長官内田康哉印、主管政務局石井の捺印があり、欄外に要詮議の毛筆書き込みがある。この報告を受けて早速左の機密文書が外務大臣名でモスコの日本公使館に送られている。

明治卅三年十一月廿四日起草 同廿七日發遣 明治卅三年十一月廿七日發送濟印 機密送第二二号 總務長

官内田康哉印 政務局石井印 主任阿部署名

在露國臨時代理公使宛 外務大臣

西藏喇嘛僧數名露京に到り方物を露國皇帝に進獻したる旨露京來電として本月七日發刊の北清日報紙上に相見へ候に付実否御取調之上果して事実有之候は 露國政府の彼等に対する待遇及び西藏に對する意向等御内

探詳細御報告相成度此段申進候也

十三、ロンドン・タイムス、西藏使節の露西亜訪問を報す

右の問ひ合せに対し、約八ヶ月後、モスコ―駐在日本公使から明治三十四年（一九〇一年）七月二十五日附、長文の報告文書が送られて来るが、それに先立ち、成田は明治三十三年十二月二十九日附加藤高明外務大臣に左の報告を送っている。

露西亜人遂に西藏拉萨に入る、西藏、使節を露西亜に派遣す

佛教の神聖地、封鎖國、蒙昧國、印度に入るの鎖鑰地等の名称の下に夙に世人の注意を惹ける西藏國及其首都拉萨は久しく他國人の足蹟を印せざりしか別紙倫敦（ロンドン）タイムス掲載に依れば凡そ一年半前に於て、露人エム・バドメイフなる者は蒙古ウルガのタラナス喇嘛より紹介状を得て遂に拉萨に入り、喇嘛教法王達頼喇嘛に謁見し、達頼喇嘛は之か答礼として使節を露帝に派遣する事となり高僧にして評議員の一人なるセニヨル・コホンバなる者其任に当り嚮日リヴァディアに於て露帝を拜するの榮を得たるか如し。バ氏は喇嘛教の教習を通し、遂に此成功を見るに至る。蓋し一朝一夕にして事此に至りしにあらざるへし、其間必ずや多年の星霜を消費せし推知すへし、然れとも是より先き露國の一族客西藏内に来るあり其名はロバロフスキーならんか、此人西藏一部の地方長官と關係を結び、且つ曰く英、西藏を覬覦する切なり如何なる事變の生ずる事ある未だ断言すへからず。我大皇帝は萬一に際し能く貴邦の爲に一臂の力を致すへし、因て二通の信書を認め之を渡せり、其一是紛議を生ぜし際外交上の補助を誘ふべきを言ひ、其二是英進撃し来らんとする際は我亦送兵

応援すへきに付之を請ふへきを言ひ、其二通共に國境近くの露國兵營に宛てたるものなりとす。此書、後ち、駐藏支那官吏の手に渡りしと言ふ。巴氏今回の成功之に起因する蓋し尠しとせず。右に付きタイムスは論して曰く英カラ薩に使者を派遣せしは遠くワアレシ・ヘスチングスの時にあり、露今に於て何事を爲さんとするか且つ拉薩に權勢を有するゴルカ・ネポール人（共に印度境界人にして英に附屬すと言ふも可なるもの）の西藏に対する不滿を拊制して以て支那及西藏に好意を表し来りしも彼等若し我に反して露に歸向せんとするか我又ネポール・ゴルカの勇者を使喚せは未だ必ずしも印度兵を派遣せずして容易に西藏を侵掠し得んのみと（成田曰く、印度陸軍士官にして藏地を探検せし者曾て語りて曰く印度山兵一大隊あれば西藏を蹂躪する易々たり蓋し殆ど僧侶のみにして兵士空しければなり）印度に於ける我門戸忽諸に附すへからず特に露國に於て拉薩と外交上の關係を結ぶに至ては大に警戒を要す。アビシニヤ又はフンザの如き失敗なき様注意せざるへからず云々。是、其大約の抄譯のみ委曲は別紙に詳なり、右に付英國總領事バイロン・ブレナン氏と旧知なるを幸ひ其意見を聞きしにタイムスの説と大差なかりしを以て鄙見を述へ之に勧告して曰くタイムスの所説は之れ露清に對する虚喝に過ぎす。若し實際茲に至れば或は恐る露と交戦の止むを得ざるに至るやを。如かず英獨協商を西藏にも及ぼし何國と雖とも之を管轄し其領地とするを得ざる様外交手段を以て決定するの好策に依る優図に出づるに。と該領事、大いに之を賛成せり。因てサルスバリ郷に貴見として上申さるへきを勧告せしなり。夫れ西藏にして露權勢の下にあらんか。遂に四川及長江貿易にも大關係を將來に及ぼすの端緒を開かん。況や曾に印度に害ありと言ふのみならんや。我國は北來の露害のみにて足れり。加之らす西來の露襲を増すは得策にあらず。駐劄我英公使は宜しく右に陳述する生か策を英政府に深秘に勧告せらるるは東洋の爲と存認す。

右具申仕候也

右の報告に、成田が訳出引用したロンドン・タイムスの英文切抜記事が、綴込みのこの部分に搜入されている。一九〇〇年十二月某日（日附不明）のものである。その全文を此処に引用するのは紙面の都合上省略する。この記事にはチベットの國內事情について誤った記述が多いが、記事全体から、西藏代表がモスコを訪問した事が英國にどんな大きな衝激を與えたかが読み取れる。そしてこの衝撃の波紋が高まり、三年後、英國は一九〇三年十二月、ヤングハズバンドの指揮する英國遠征軍を西藏に送る事になるのである。

十四、駐露日本公使より、外務大臣宛て、西藏使節の露西亜訪問に関する報告

西藏使節は一九〇〇年と一九〇一年の二回に亘りモスコを訪れ、ロシア皇帝に会っている。外務本省からの問い合わせは、第一回目一九〇〇年度訪問に関するものであったが、日本公使からの報告は、第二回目の訪問に重点を置いている。

機密受第二二八九号 内田康哉印 長官署名

機密第一一号 西藏喇嘛の使節再び露國に來りたる件

昨年秋、西藏喇嘛の使節露國に來り露帝に謁見し方物を獻じたる件に付き、客年十一月二十七日附機密二二二号貴信を以て御申越の廉有之候に付、本官は同伴及露國政府の同地方に関する意向処置等に関して終始注意し研究致來候、昨年十月中旬 喇嘛の使節露國に來り當時皇帝の行在地たりし「クリミヤ」半島の「リヴァディア」

に於て皇帝に謁見し、喇嘛の書翰及方物を獻したる事は事実なりと確聞せるも、當時露國政府に於ては何故にや秘密にし、官報及諸新聞共に此事に関し報道する所なくして、其使命の目的結果等は一向詳に聞く事を得ざりしが、先般、或筋の一説なりとして伝ふるものを聞くに西藏と露國との交際は元々露國政府より其端を啓きたるものにて其起りは彼の清國事件に就きて有名なる公爵「ウフトムスキー」の計画に出でたるものにて、先年露國政府の使節たる性質を帯べる官吏の一行「ラッサ」府に至り喇嘛法主に面會したる事ありし由にて昨年同法主の特派使節を派遣したるは曩年の返禮として單に好を問はしめたるのみにて別段政治上の意味なく使節は此用向を機として觀光の爲め露國に來りたるにて右「リヴァディヤ」にて謁見を了へし後、聖彼得堡（セント・ペテルブルグ、又はペーテルホフの事）へも來りたる事ありしと言ふ

然る処今回又同様の使節再び當國へ來着し本月六日「ペーテルホフ」の離宮に於て露帝に謁見し喇嘛の書翰及方物を獻上致候 今回の使節に就ては露國政府は少しも之を隱秘する処置を執らず同使節の英領印度「コロンボ」より露國義勇艦隊漁船「タンボフ」号に乘組み「オデッサ」に向ひたる事より同使節「オデッサ」に到着せる節官民の觀迎せる状況及當地來着以來同使節の宮延に於ける謁見の事、外務、大藏、陸軍諸大臣及「ウフトムスキー」公爵を訪問せる事、諸所にて歓待を受けたる事等一々詳に諸新聞に報道せられ殊に同使節の謁見に就ては官報を以て通常外國使臣の謁見を記せると同様の形式を以て報道致し候 乃ち七月七日發刊官報の宮延録事欄内に曰く

「本月二十三日（日本曆七月六日）土曜日、皇帝陛下は「ペテルホフ」大離宮に於て西藏「ダライ」喇嘛の特派使節「スタルシー・ツエニット（官名）、ハンボー・アフヴァン・ドルジエフ」及「ループサン・カインチョカ・ハ

ンボー・ドニル」に謁見仰附られたり 特派使節謁見の後、其使節の書記官、西藏地方長官「ジャンツァン・ゾンボン・ヂヂョング・ピュンツォク」は皇帝に謁見の榮を得たり、使節謁見の序を以て勅諭を以て通譯の爲使節に附屬せる「ドン・コサック」第一聯隊附少尉「ウラーノフ」は皇帝に拜謁の榮を得たり 皆 使節は又、皇太后「マリヤ・フェドロウナ」陛下へ謁見するの榮を得たり」

此使節の主席たる「ドルジェフ」は昨年十月「リヴァディア」へ來りたる使節の主席と同一人なる由にて元と露領中央亜細亞に生れたる者にして西藏人と云ふよりは寧ろ露國人と言ふべき者なりと言ふものあり然れども本官が在當地清國代理公使より聞きたる所によれば同人は嘗て佛教上の用向を以て北京に來り同地に駐在せし事ある由にて清國官話にも通じ居れる由に候

右使節の用向如何に關しては種々の臆説あり外國の新聞紙には早くも之を以て西藏に対する露國侵略策実行の端緒を現はせるものと見做し喧しく評論せるものあり 當地の新聞紙にても例の「ノーヴォエ・ウレミヤ」は早速、露國の西藏に關する深厚の友誼を唱へて彼等使節の再來を以て露國の保護を希望するの趣意に出ずるが如く論じたりしが「ウフトムスキー」公爵の發刊せる「ペテルブルグスキヤ・ヴェードモスチー」は忽ち之を反駁して大早計の暴論となせり 此使命に關し本官は在當地英國大使の説を叩きたるに同大使も此事に就きては可及的注意せるも何等格別政治上の理由ありて來りたるものと認むべきことも聞かざる由申居り候 尚ほ本官は清國代理公使にも質す所ありしに同代理公使の言によれば本使節は客年の使節共々全く清國中央政府に何等沙汰も無くして出で來りたるものにて其使命の理由は充分知り難きも今回の使節は先日清國公使館を訪問したる由にて其節同代理公使は使節に向ひ何の用向を以て當地に來りたるやを質せるに使節は之に答へて近來露國遠

征家の西藏領に入り来る事間々ありて先般も露國一遠征隊西藏領内に入り故なくして西藏の住民十数名を殺害し其結果人心不穩なるを以て今後露國より妄りに遠征家の來らざる様露帝に請求せんため來りたるものなりと申居候由 此申譯は後に翻譯せる「ペテルブルグスキヤ・ヴェードモスチ」新聞の社説と符合致居候故 其申譯の眞偽は兎に角「ウフトムスキ」公爵と本使節との間に於ける關係の消息を認むるを得ずと存じ候 たとひ今の使節の用向は使節の述る如きものたりとするも露國宮廷及政府の彼等を厚く優遇せるは露國の懷柔政略の現はれ来るものに外ならずして漸を以て交を厚くし機會あらば己の勢力を伸ぶる用に供せんとするは疑を容れざる所なりとす。

左に上記新聞社説の要領を翻譯せしに

六月二十九日「ノーヴォエ・ウレミヤ」社説 西藏の使節は不日聖彼得堡に到着すべし 其「オデッサ」到着の際に於ける歡迎の状況は連日の電報之を報せり、此使節は四名にして其主席は西藏の法主「ダライ・ラマ」に近侍せる最高の「ツァニット」なる「アホラレボー・アチュヴァン・ドルジエフ」にして即昨年既に一たび我露國に來り同九月三十日（日曆十月十三日）「リヴァティヤ」の王宮に於て我皇帝陛下に謁見を仰附られたる人なり、此「ドルジエフ」が今や西藏の頭官数名（就中一名は「ダライ・ラマ」の二等書記官の位置にあり）を伴ひ更に露國に來りたる事たるや、曩に「ドルジエフ」が露國より歸りたる節賣らしたる紀念に西藏法主をして露國と親密の交誼を設定鞏固にするの希望を強めしめたる事を示すものと云ふべし 此事たるや昨年清國に發生したる事件と相綜合して考察せば何人も奇異とする事なかるべし 只清國を以て尚ほ痴鈍不活潑なる國とし 其直隸省に於ける事件は遠隔の地方に於て毫も覺知せられざる程度にある如く考ふる人に在りては「ダライ・ラマ」を動か

して露國に使節を派出するに至らしめたる所以の疑問を解決する事能はざるべし 然れども苟くも東洋を熟知し此地方に於て例ひ迅速電光の如くならざるも なほ遠く發達せる露國の電信が遼遠の地方に於て起りたる事件を廣く各地に傳ふる事 例證すれば南部及中央亞弗利加の人種間に起りたる事件すらも速に傳へる事を熟知せば、太沽、天津、及北京に於ける事件、露國の滿洲に於ける成功、奉天府の占領其他の事に関する報告が直ちに西藏に達し來る事に驚かざるべし 西藏の土地たる名義のみにもせよ清國保護の下に立ち居れば清國の政府動搖するに方りては 既に久しく西藏の門戸を窺ひ第一の機會至らば直ちに利用して力を以て門戸を破碎し侵入せんと準備せる彼 英吉利人の野心及好計に對し之れが防碍の力を貸し得べき唯一の強國として我露西亜に彼等が親近せん事を求むるの不得已は自然の勢と言ふべし 抑も露國は中央亞細亞に於ける最強國たるの地位を占むるも嘗て利己の慾心を顯はさざるを以て地方種族中其仁義に信賴し其傳來の政略及び其勢力に歸服し或は其保護を希ふ者皆之ある事實を考ふる時は此隣強國に就き西藏が保護を求むるは當然の事なり 否独り西藏に止まらず清國西北方露國隣接地方の者にして露國保護の下に其安寧靜謐を維持せん事を切望するに至るべきは亦自然の勢ならざるはなし況んや此任務は露國自身の利害と全然一致するものたるに於ておや。新聞紙にも其要領を報ぜる所の彼の西藏使節が英領印度を通過する際遭遇せる困難は西藏が英國の爪牙を實驗せる事一たびに止まらずして何が故に其視線を北方白哲の「ツァール」帝國に向くるに至りたるやを充分に説明するなり 英人は西藏に對し決して好意友誼を以て其手を延すものにあらず 英人は彼等に平和の握手を捧ぐるものにあらず 彼等の上には既に所謂英獅の蹄再三踏み入れられたるなり 英獅は今日と雖ども決して其欲望を減ぜず其印度に於て襲撃の準備に汲々たるは「タイムズ」通信者の報ずる所の如し夫れ自家を害するの目的を以て武器

銃器彈丸諸爆裂物の製造せらるる事を自ら知らざるものある事能はず 尤も此等の危険物は英人が少数ながら勇敢に自家の独立を死守せる國民を征服する事能はざる南亞弗利加に在りては何等驚くべき事を起す事能はざりき 此勇敢なる防戦の風説は無論西藏にも達したるべきなり

七月二日「ペテルブルグスキヤ・ウエドモスチー」社説——西藏に関する空中樓閣——

西藏「ラッサ」府より喇嘛の官吏「アグヴァン・ドルジエフ」到着したるに關し近日諸新聞は西藏に保護領を設くと言ふ事に就き喋々無稽の説を竝べたり、夫れ吾人が夙に中央亞細亞の事件に注意し我國民中仏教信者の外、近ずき得ざる彼の喇嘛の鎖鏡に就き外交家及東洋を経営する人士の研究を盡し之に通曉する事の必要なるは素より論を俟たざる所なりと雖ども此地方に關し半ば想像上抱ける趣味より進で實際未だ人の知らざる土地に或拓殖的成功を世に唱ふるに至るまでは実に尚ほ甚だ遼遠なりと言はざるべからず 新聞紙にして露國が此僻陋の地に其勢力を樹立し及之と最親密の關係を設立する等の意思ありと妄言するは公衆に對し慣用の瞞着手段を弄し英國流の曲解的眼光を以て「アグヴァン・ドルジエフ」の西方旅行を批評するに過ぎずとも言ふべし 英人は此等妄言の意義を誇大にし、以て速に自ら其爪牙を西藏に入る事を得る事を喜ぶるべし 吾等露人は斯る舉動に出ずべからず 而して他人の斯る舉動に出るを防止する事は常に困難なるのみにあらざるなり 故に吾人は試みに問はんとす「ダライ」喇嘛が自ら全く露國政府の支配に投じ来るべしとか、此若年の法主を擒にする事容易なりとか、或は喇嘛の國家及首府に近づく事彼得堡よりも容易なりとする如き皮想上の物語は之を以て果して何人を娛ましめんとするなるかを。

今より既に十二年以上の昔「ルスキー・ヴェーストニツク」新聞に「スゴルスキー」の署名を以て現れ、其後「ルスキー・オボズレニエ」新聞上に現はれたる文に於て最新及旧来の材料に基き「ラッサ」府、同府への旅行、及西藏問題に對し不幸にして薄弱なりし我政府及社会の注意を向けざるべからざる目的等に就きて既に知られたる（尚ほ精密に言へば知られざるべからざりし）總ての事項に關する説明世に公にせられたり 當時此等の材料に何等價值を置くの必要を認めたるものなかりしのみならず此時代に於て某々新聞紙等は西藏に關し特に重要な後貝加爾（バイカル）地方に於て異人種（明かに佛教者を意味す）を追拂はんことに筆を勞せるものありしなり 斯く僅かの過去に於て嘲弄の目的物たりし此地方に就き今や突然陽に好意を装ひ瞞着せんとする議論の發生するものありて頻りに同情的の言語をなすあり、若し此等の言語にして其輕薄より何等弊害を伴隨し來る事なしとせば敢て咎むるに足らずと雖ども所謂保護領云々を喋々するに至りては其結果より該地方に彷徨する我同胞に種々の不利益を誘起し何等頓着なき支那人を煽動し英領印度政府を駆りて一層活潑なる政略を執るに至らしむべきなり 而して西藏人は目下只其國內に異人種の侵入し來るを制御せんと欲する外他の希望なし 此等の異人種の來る事は明に純然學術上の目的を以てするものたりとも毫も別つ所なし 何となれば所謂學術探検隊にして一遠征中「ダライ」喇嘛の領内にて二十一名の人民を銃殺するを憚らざりしものあればなり、「ラッサ」府の君主が露國に對し所謂信賴し來たるとなせる裏面の事情を弁へて自ら試に問へ、彼れが使節を送り來たるは 其國は世に所謂「レス・ヌリユス」（無物）と称せられて地理上の情形全く他國と離れて独り存立すべき理由あるを以て 我に請求するに彼國の運命に關し 我に於て侵入的形式を以て彼に關係する事一般に尠なからん事を乞ひ來たるにあらざるなきやを。

尚右使節等は目下尚ほ当地滞在中なれども遠からず帰國の途に就く筈の由新聞紙に掲載致居候

右奉具報候 敬具 明治三十四年七月二十五日 在露特命全權公使 珍田捨巳 印

外務大臣 曾禰荒助殿

十五、成田、外務大臣に西藏開放の必要性について意見具申

明治三十三年十二月十五日附 外務大臣加藤高明殿 成田安輝 機密受第八〇八三号

西藏開放の必要に就て

露人の外交政略に敏旦つ巧なる蒙古ラマ等の朝貢使として北京に來るや其公使館内に寓居せしめて優待し之れか人心を得るに勉めり今回西藏ラマ露京に方物を齎らせしと言ひ又其後西藏達賴ラマより特使を派遣せし事と言ひ想ふに皆露か北京に於て西藏ラマを優待し此間に密接の關係を附け以て事茲に至りしなるへし 特に今回の拳匪事變に附ては大いにラマに保護と便宜とを與へ一層人心を收攬せしならんか 是に於て達賴ラマより露廷に向ひ特使派遣の舉に出たるか如し 而て此半開瞞昧なる使節に對し露廷は如何なる事をなすや憂ふべきなり 今に於て對藏策を講せすは後日如何なる患害を生ずる未だ知るへからず 今回の事變に際し彼を好待して人心を得たるは露にして、藏経を取獲し彼の感情を害せしは恐らくは我ならざりしやを惜む 要するに露の所爲敏捷巧妙と言ふへし、北京の我公使館は今後西藏ラマに幾分の注意を與へられん事を切望す、西藏我を距る遠し 我に於て痛傷何かあらんと言ふは 尚ほ遼東或は黒龍江を□にし朝鮮國境に迫るに及んで始めて周章するか如し 或る英米人は言へり露は現今彼の所領なる中央亞細亞サマルカンドより西藏、甘肅、四川、河南、

湖北に來り漢口に出るに意あるか如しと、夫れ或は然らん今に於て其南下障止の豫防あるを要す。

西藏に對する我道義上より一言せは提督ペルリ我に來訪前と同じく二十世紀の今日尚鎖國の夢中に在り同病相憐むは人の至情前進國の後進國に於ける特に然るべきなり況んや同種同教同洲の後進國なるをや 我國之を誘導するの天職あるは支那扶翼より一層を感じるか如し支那を扶植せんと欲せば西藏亦扶植すへし保全すへし次に利益上より論するも西藏は廣漠たる牧場にして近來年々我需要を増加する羊毛の如き或は高貴なる香料及藥材に供する麝香の如き其他毛皮、鉾物、藥材原料の如き或は印度より或は楊子江より我に運輸し、我既製品を彼に輸送せば彼我相互の貿易に補益なしとせず 而て貿易を開始するにも豊富なる鑛山を開掘するにも我國民の移住を圖るにも支那官吏、達賴ラマの然諾を得るを必要とす 而て此一事は我外交政策に俟たざるへからず、外交政策の此地方に對し最も緊急なる一事は西藏開放にあり、彼我の往來も通商貿易も、人智の啓発も事業の興起も皆開放より生出す、今試に我政略上より之を論するも道義上利益上我に如此必要なる關係を有する西藏をして露に先便を着けられんか我爲に不得策にして他日長江方面に於ける我利益にも侵害を蒙るなきを保し難きに至らん 彼南下して漢口に至らんとするに先立ち先ず西藏より聯統せしむる下心なるや未だ知るへからず 我之れが豫防をなし他日の禍患を阻止するは緊要にして怠るへからず 之れを阻止するの道他なし即ち西藏開放なりとす 今日の形勢に就き西藏開放の難易如何を按するに今の時機を活用して之を爲す強いて難事にあらず 此機一度之を失ふ何れの日か亦之を得ん要するに門戸開放主義は支那及西藏一圓に及す事は利害上英も亦賛成なるへし米亦其國論より然るを知る故に我先づ之を私に英に計り其賛成を得又米に商りて其賛成を得然る後此三國は西藏開放の發起者として列國に向ひ之を商議せば講和條件中に西藏開放の條件を拊入する

容易ならずとせず　在重慶米國副領事ルイス氏の如き四川に在る業已に十八年平素西藏の事にも注目せる人物なるが生が西藏開放説に賛成し且つ曰く現北京駐劄米國特派議和委員ロックヒル氏の如き往年西藏拉薩行を試みし事前後二次　ロ氏亦必ず此説に賛成ならん　或いは亦既に同説を持する未だ知るへからず　而て列國は之を実行するならん云々　彼等の意向亦如此因て此事御実行ありて然るへく認申候　是亦御参考迄

我新任駐清國公使へ御轉示被下度奉願上候　安輝　謹具　以上

要するに成田が提案している事は、西藏がロシアの手に落ちるのを座して待つ位なら、日、英、米三國が相計つてロシアの機先を制し、西藏を開放しよう、英米も反対しない見透しだから、北京で開始されている義和団事變の後仕末、講和條件の中に西藏開放の項目を入れて交渉したらどうかと外務大臣に具申している訳である。右の文中に見える「今回の事變に際し……蔵経を取獲し彼の感情を害せしは恐らくは我ならさりしやを惜む」の意味は、左の経緯を指すものであろう。明治三十三年夏、義和団を撃破した日欧米八ヶ国連合軍が北京に入城し、紫禁城と万寿山とはロシア軍が占領、掠奪した。又、北京市内の寺廟も連合軍によって荒らされ、寺宝、經典、版木類が散逸した。その際、日本公使館と第五師団司令部附の兼務通訳で従軍していた寺本婉雅師が北京市内の黄寺及び資福院で散逸寸前の西藏語大蔵經典を発見、保護した。後、寺本師のラマ救済活動、清朝皇室協力に対する恩賞としてこの經典が寺本師に惠贈された。同師は百余箱に及ぶ西藏語大蔵経を日本に送り、それは

東京巢鴨の眞宗大学図書館に保管された。（蒙藏旅日記三五四―三五七頁）

十六、成田、四川省に於ける鑛山開掘權に關し一時歸朝を要請、外務省これを斷る

更に成田（在上海）は明治三十三年十二月十四日附 加藤高明外務大臣宛て「四川省に於て鑛山開掘權を我邦に得置く必要に就き一兩日歸朝面陳願出の件」と題する文書を送っている。全文次の通り

謹啓 愈御多祥奉慶賀候 北清に於ける我軍隊の好評は新聞紙上伝説以上にある趣近頃北京より帰申の國人実話にて今後の善後策上大いに好都合と存し爲邦家賀し候 隨而当地の人氣も大いに我に向ひ好意を表するに至れり 当地のみならず各地の通信皆異筆同信に御座候 特に四川は不肖不徳の生等日本人の先往者として入蜀し上總督より民間有力者の間に來往せしも未た何事をも爲し得ざりしにもかかわらず兎に角我に好意を顯し來りつつありしに今回の事變にて更に其度を進昇し來れり 昨今井戸川大尉の報告に依れば現に二萬兩を投じて我邦人と合資起業せんと欲するものあり云々、其他江河運輸事業 製造事業等我と合資起業を望み或は我國人の名義を借らんと欲するもの等間々有之候 特に現今最も忽諸付すへからざるは鉞物採掘權を我國に得置くべき事なりとす 英國有力なる資本家を以て組織せる Upper Yangtze Trading Company 清名普濟公司は在重慶英商アアチボルト・リットルを代表者とし各種の事業に従せんと計畫致居候 前重慶佛領事ハアス社社長たる佛蘭西の四川鑛山会社及英富豪ブリッチャド・モルガンの會同鑛務公司以外に於て四川採鑛事業に従事せんとし四川に於て鑛務に明通するの聞こえある新設重慶鉞務学堂山長宋廣平とて元支那陸軍副將たりし者を其顧問に雇入れ當地に來遊せは優待して諸公司内に宿泊せしめ人を得る事等に拔目なし 而て其開鑛せんと欲する所は支那に於ける有望なる產鑛地四川省に在て最も有望なる地方にして此地方は金銀鑛特に黄金豊富なりと

す 即ち鑛字書旅行記等にて從來より生竊に注目致置きたる地方の一部分なり 事既に如此以上は之に接続して平素注目して置きたる地方も急に人の着手すへき地にあらすと放棄し去るを得ず我國に於ては愈他に先し之れか採掘権を得置くの必要を認め申候 其地は黄金豊富にして支那人の認めてエルドレドとなす所 將來のクロンダイクか或はトランスバールのヨハネスバルクの附近の如き著名の産金地たるに至る地方に候 今日迄の調査に依れば假令拉薩に至るも西蔵の他方面に於て如此豊富なる産金地方を見出す能はざるへしと信申候 旦つ又、右、宋氏の説に依るも去る十一月二十四日附を以て四川鑛物採掘権を得置くの必要を申上置候節約略陳述せし如く成都に於ては我開鑛請求を必ず許さるへしと申傳候 英仏人は四川のみならず業已に雲南貴州の鑛山にも着手致居候 我若し怠らんか 他日各地に於ける鑛山盛開の日我國人は近隣の鑛山より人の財寶を持去るを空しく傍觀して噬臍及はざるの一日あらん 天の與ふる之を取らされは却て其禍を受く 今や清人我好情を認知し人心我向ふの好機を活用し 我國の爲四川に鑛山開掘権を得置くの必要を認申候 事機微に關するあり委曲は面陳致度、又御下問にも奉答仕度因て一兩日間なりとも歸朝御命し被下度此段伺上候 敬具

追伸 右は四川西蔵國境及其他に係はる事にして当初入藏計畫の節此辺の事に注目するは實に其大綱目中の一なりしを以て耳朶は常に此辺にも傾け居りしか今や他國か此辺に於ける進歩と共に我に於ても愈開鑛權利を得置くの必要を感じ業已に此地に採鑛権を得るの緊要を献言し言責を盡す既に二回に及候 御諒察被下度候鑛物採掘権を得るも僻遠の地採掘者なきを如何の遲疑心、長江上行の業容易にあらずとの屈撓心皆否なり英に佛に共に不屈不撓之を断行するの決心あり 比隣の我袖手徒視するは不可なり況んや長江汽船航路重慶まで開通せんか從來三十日以上を消費するの地接近して上海より僅かに十五日以内にして重慶に達し、下申亦十三

日に過ぎると言ひ又我か採掘権を得る事は彼の望む所にして開掘容易なる金鑛なるをや願出の趣、邦家の爲御賛成を得度候 此信意小林新支那公使へも可然御傳被下度候 奉願上候也 以上（傍点原文）

右の帰朝願に對し、外務本省の内田康哉總務長官は明治三十三年十二月二十八日附 在上海 成田安輝宛て左の親展の返書を出している

拜啓 陳者去る十四日附 外務大臣宛書翰を以て四川省に於ける鑛山開掘権獲得の義に關し事面陳の必要有之に由り一時帰朝致度旨申出願■相成居候處經費の都合に依り詮議難及候間御意見の次第は委細以書面御申越相成候様致度此段回答旁申進候 敬具

（続）